

## 書評

Nicolae Morar, Thomas Nail and Daniel W. Smith 編

*Between Deleuze and Foucault*

Edinburgh University Press、2016年、304頁

瀧口 隆\*

ジル・ドゥルーズ（1925-1995）とミシェル・フーコー（1926-1984）は、同時代に活躍した哲学者であり、今日においても「現代思想」の代表的な哲学者である。本稿で取り上げる *Between Deleuze and Foucault* は、ドゥルーズとフーコーの関係の伝記的な事実やフーコーのドゥルーズ論とドゥルーズのフーコー論に合わせて、彼らの思想的な関係について多様な論考が編纂されている。1960年代にはフーコーは高くドゥルーズを評価し、ドゥルーズも1986年に『フーコー』を出版するなど、両者には強い結びつきがある。

本書は、そのような二人の関係について一冊の本としてまとめたものではあるが、編者が設けた4つの部門に分けられているものの、集められた複数人の論考は、扱う書物や主題などが多種多様である。よって何か一つの確固たるテーマが本書全体を明示的に貫いているわけではない。したがって本稿は、本書における第2部から第4部を「未規定性」から貫かれるドゥルーズの「抵抗」の哲学の観点からつなぎ合わせ、本書が示すドゥルーズのフーコー論を見ていきたい。

### *Between Deleuze and Foucault* の概要

本書を構成する4つの部門にあわせて、そこに収録される論考を簡単に紹介する<sup>(1)</sup>。第1部「出会い (*Encounters*)」では、ドゥルーズとフーコーの直接的な関係について論じた文章が記載されている。それぞれの互いについての論考である、フーコーによる「劇場としての哲学」、ドゥルーズによる「ミシェル・フーコーの基本的概念について」の英訳や、フーコーの著作を読み利用した背景について述べた Antonio Negri (Kristopher Koltz 英訳) の「いつそしてどのようにフーコーを読んだか (*When and How I Read Foucault*)」とともに、François Dosse の「ドゥルーズとフーコー：哲学的友

---

\* 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程；te2no.kata0@gmail.com

情」がまとめられている。François Dosse の文章では、リセの教員であったドゥルーズとリール大学の心理学の助手であったフーコーの 1952 年の初めての出会いから、彼らの関係の伝記的事実をはじめ、彼らの思想的な対立について、とはいえドゥルーズが生涯を通じてフーコーの著作に注意を払い続けていたことについて述べられている。

「方法と批判 (Method And Critique)」と題された第 2 部では、ドゥルーズとフーコーの哲学の方向性について議論された論考が編纂されている。Colin Koopman の「フーコーとドゥルーズにおける批判的問題化：判断なき批判の力能 (*Critical Problematization in Foucault and Deleuze; The Force of Critique without Judgment*)」では、両者がカント以来の超越論的条件を問う批判哲学をある程度は継承しつつも、「未規定性 indeterminacy」を重視し、条件自体を問いの対象とする「問題化」という方法をとることが指摘される。John Protevi の「1970 年代後半フーコーのドゥルーズ的方法 (*Foucault's Deleuzian Methodology of the Late 1970's*)」では、1970 年代半ばから後半にかけてのフーコーの差異の歴史的方法論において、真理の条件を内在的歴史的現実として示すことにドゥルーズ的性格を見いだす。つまり John Protevi によればフーコーは、経験の可能性の条件ではなく、差異的な領野からの現働化における「現実の経験」の発生条件を示すのである。また Frédéric Gros (Samantha Bankston 英訳) の「ドゥルーズのフーコー：形而上学のフィクション (*Deleuze's Foucault: A Metaphysical Fiction*)」は、ドゥルーズのフーコー論をまとめながら、最後に形式に還元されない力関係や、ドゥルーズの『フーコー』の終盤で論じられる心理的内面性をもたない「絶対的記憶」に、言明されないもののそこに響き渡るドゥルーズのベルクソン読解の影響を示唆する。

第 3 部「収束と発散 (Convergence And Divergence)」では、より具体的に、彼らの哲学と政治実践の結びつき、「歴史」概念や認識論など多様な観点からドゥルーズとフーコーについて論じた論考が連なる。Leonard Lawlor と Janae Sholtz の「他者へと語ること：ドゥルーズとフーコー (とハイデガー) における哲学的活動 (*Speaking Out For Others: Philosophy's Activity in Deleuze and Foucault (and Heidegger)*)」では、彼らの哲学におけるハイデガーの影響と、他者へと語ろうとした彼らの監獄情報グループ (GIP) の実践を見ていく。その実践は「他者へと語ること」であり、そこにこそハイデガーからの

離反としての同じものの回帰を打ち破る存在の生成が現れる。また、Paul Patton の「ドゥルーズとフーコー：政治活動、歴史とアクチュアリティ (*Deleuze and Foucault: Political Activism, History and Actuality*)」では、フーコーは1978年から79年にかけての講義において、ドゥルーズ＝ガタリと同様に新自由主義の原理分析を行ったのに対し、フーコーが新自由主義の公理に従属する国家権力への疑念というより、社会主義にふさわしい統治形態を問うことを目的にしていたことを明らかにしている。Anne Sauvagnargues (Alex Feldman 英訳) の「生成と歴史：ドゥルーズのフーコー読解 (*Becoming and History: Deleuze's Reading of Foucault*)」では、ドゥルーズのフーコー読解が、潜在的かつ創造的な「生成」という力と、それに形を与え現実化させる「歴史」が共存することへと向かうと主張する。Kevin Thompson の「フーコーと「思考のイマージュ」：考古学、系譜学と超越論的経験論の勢力 (*Foucault and the "Image Of Thought ": Archaeology, Genealogy, and the Impetus of Transcendental Empiricism*)」では、認識論の歴史的断絶を見るフーコーの「考古学」的方法にカヴァイエスなどのエピステモロジーの影響を見つつ、しかし歴史的断絶を超越論的な条件に見ていたことこそがフーコーの新規性であり、そこにドゥルーズと同様の超越論的経験論の批判的な関与を見て取る。Mary Beth Mader の「言説の規則：フーコー『知の考古学』を論じるドゥルーズ (*The Regularities of the Statement: Deleuze on Foucault's Archeology Knowledge*)」では、ドゥルーズのフーコー読解の一つのテーマとしてフーコーの「言説 statement」の議論を取り上げ、ある言語体系から別の言語体系へと移行することが可能な「言説」の内在的な規則について議論が整理されている。

第4部「欲望、権力、抵抗 (Desire, Power And Resistance)」は、ドゥルーズの「欲望と快楽」の英訳を皮切りに、ドゥルーズとフーコーの権力論における政治と社会、抵抗の問題の捉え方の違いに関する論考が連なる。Nicolae Morar と Marjorie Gracieuse の「不協和なテーゼに反して：欲望-快楽の問題の異なる読解 (*Against the Incompatibility Thesis: A rather Different Reading of the Desire-Pleasure Problem*)」では、フーコーは、欲望が告白のプロセスを通じて正常化システムに寄与するとして、欲望を否定的に評価したのに対して、ドゥルーズはフーコーとは全く反対に欲望は生産的な身体の力である限り抵抗の場を創り出すもののだとして肯定的に評価することが指摘される。

Thomas Nail の「生権力と管理 (*Biopower and Control*)」は、ドゥルーズ的な「管理」とフーコーの「生権力」「生政治」の概念を比較しその文脈を明らかにしていくなかで、両者とも「人口」といった集団の生命を内容とし、確率による管理を形式としている限りにおいて収束すると結論付ける。Daniel W. Smith の「抵抗の二つの概念：フーコーとドゥルーズ (*Two Concepts of Resistance: Foucault and Deleuze*)」では、両者の「抵抗」における課題の違いを明確にする。フーコーにおいては、「抵抗」は自己が自身に対して権力を行使する問題、つまり自ら主体を生み出すことが問題であったのに対して、ドゥルーズにおいて、「抵抗」はむしろ存在論に組み込まれており、「抵抗」の逃走的な性格を捉える社会形態こそが問題である、と比較・整理しドゥルーズとフーコーの異なる「抵抗」の在り方を提示している。

## 「未規定性」と「新しいもの」

以上本書全体を見渡したが、そこで見えてくるのは、本書がドゥルーズとフーコーの共通する哲学の方向性から出発し、最後の第 4 部においてドゥルーズとフーコーの政治戦略について、特に「抵抗」に対するアプローチの仕方についての相違が強調されるという道筋である。これを踏まえて「ドゥルーズのフーコー読解におけるドゥルーズの強調点を見ていく。このドゥルーズの強調点とは、端的に言えば、ドゥルーズがフーコーに、「未規定性 *indeterminacy/ indétermination*」から導かれる新しいものを創造する力を読み込んでいることである。このことは、Nicolae Morar と Marjorie Gracieuse の論考で明らかにしていた、ドゥルーズが何かを生産する「欲望」を「抵抗」の原動力として肯定的に評価する姿勢や、Daniel W. Smith が示したような、「抵抗」を実現する社会形態の発生を議論しようとするドゥルーズの姿勢に通底するだろう。ドゥルーズは、フーコーの方法を概観した「装置とは何か」(1988)の後半で、フーコーが、現にこうであるものに抗して他なるものへと生成すること、反時代的で非現代的な新しいものへと向かうことを強調する<sup>(2)</sup>。

この「新しいもの」とはドゥルーズにとってどういったものか。このことについて、本書はまず、ドゥルーズとフーコーに共通に見いだせる「未規定

性」への関心から出発している。この「未規定性」は、ドゥルーズとフーコーの方法論について論じた Colin Koopman の論考でたびたび出てきたものであり、そこではこの「未規定性」が超越論的審級の絶対性を解体するフーコーとドゥルーズの共通した試みにおいて重要な観点となっている。

そして本書の最後の Daniel W. Smith の論考は、ドゥルーズとフーコーの相違点を示して、「未規定性」と「新しいもの」のつながりについて示唆を与えている。フーコーとドゥルーズの「抵抗」について比較した Daniel W. Smith によれば、フーコーにとっては「抵抗」が、自身が自身に行使する力であるのに対して、ドゥルーズにとっては所有できるものではない。むしろ、抵抗は存在論的な力能であり、そのような力を所有しようとする体制から逃れるような性格を持つのである。つまり彼の指摘を踏まえれば、既存のものから断ち切って逃走する「新しいもの」とは、ドゥルーズにおいては存在論的な次元で考えられている<sup>(3)</sup>のである。

これを踏まえたうえで注目したいのが、Frédéric Gros が終盤で示唆する、ドゥルーズのフーコー論の裏で流れるベルクソン論の影響である。ドゥルーズはフーコーの超越論的条件の歴史的断絶の背後に形式化されない力関係、ベルクソンに引き付けて言い換えれば、未規定な潜在性を見ている。この規定を逃れ続ける潜在性を、いかにして現にこうであることに抗する仕方で見えるのかが、ドゥルーズ的な「抵抗」の特徴である。つまりドゥルーズは、ベルクソンに影響を受けた未規定な潜在性を基盤とする存在論を踏まえ、その未規定性でもって超越論的条件を批判する。それを踏まえたうえで、さらにドゥルーズは、フーコーを論じるなかで、逃走的性格を持った「新しいもの」を創造する抵抗の戦略を見いだす。つまりこのことから、ドゥルーズにおけるベルクソンからフーコーへの道筋、根底にある「未規定性」から「新しいもの」の創造性への道筋を導くことができるだろう<sup>(4)</sup>。要するに本書は、「未規定性」を根底とするドゥルーズの存在論が、第2部における哲学の方向性から第4部の政治論にかけて貫かれていることを示している。そしてドゥルーズとフーコーは、本書第4部で多く論じられているように、政治論、特に「抵抗」という観点をめぐって相違がはっきりとする。

では「権力」の話題を見ていこう。フーコーの権力が偏在することの指摘を引き受けながら、ドゥルーズは以下のように権力を捉える。権力とは、形式化された抑圧する国家のような制度や組織を指すのではない。さらには

そのような特定の社会システムが完全に所有することもできないものであり、むしろ支配者にも被支配者にも同じように貫通する不定形で未規定な力関係として論じられる。そのような権力関係は、形式を伴った「知」や「認識」のなかに表出されるのだが、権力はそのような形式化された物に還元されない。それは、むしろ形式を構成する力なのである。つまりドゥルーズが強調するのは、権力それ自体はまだ現実化されていない未規定なものを含み、あるいはまだ形になっていない潜在的なものだということである。

では問いは以下のようになるだろう。このような潜在的な「権力」が、現にあるものの再生産に還元されないで、現行のものとは異なる「新しいもの」を生み出す創造性、潜在的な逃走的性格をいかにして発揮させるのか。このような抵抗の「戦略」が問われることが、ドゥルーズのフーコー読解において投げかける最も核心的な問いだと考える。Anne Sauvagnargues が論じていたように、ドゥルーズのフーコー読解では、潜在的な「生成」とそれが形を成すために必要とする現働化の環境としての「歴史」の共存が問われるのである。さらにこれこそが、ドゥルーズがフーコーに適用している読解の原則であると述べる。つまりここで Sauvagnargues が「共存」と言うことで強調しているのは、現働化する *actualize/ actualiser* 働きに寄与する「歴史」は、潜在的な「生成」を規定するものではなく、その潜在的な「生成」の問題と共存して問われることで、既存なものに回収されない未規定な「新しいもの」の現実化に関する問題として問われる、ということである。

そしてドゥルーズが「装置とは何か」において指摘しているように、フーコーにとっての「アクチュアルなもの」とは「新しいもの」なのである<sup>(5)</sup>。フーコー読解を経由することで、ベルクソンから引き継いだ「潜在性-現働性」の議論は発展し、「現働的なもの=アクチュアルなもの」は新たな意味を帯びる。つまり現働化は、潜在性を規定する働きであるだけでなく、判然としない、既存から逃れる「新しいもの」と常に共存するのである。アクチュアルなものが新しいものであるがゆえに、たとえ現働化されて規定されているように思われていても、現にこうであるものに対して常に「抵抗」できるのである。

そしてこのドゥルーズにとっての抵抗は、フーコーのものとは異なる。なぜなら上で見てきたように、また Daniel W. Smith が示したように、フーコーにとって「抵抗」とは自身が自身に施す主体化のための自由の実践である

のに対して、ドゥルーズは「抵抗」の議論を「未規定性」を根拠とする存在論から一貫して導き出しているからである。以上が、本書が集積する多様な論考を、ドゥルーズとフーコーの方法と批判からそれぞれの抵抗の在り方までつなぎ通したうえで浮かび上がってくる、ドゥルーズのフーコー読解の道筋である、と言えるだろう。

## 注

- (1) すでに邦訳が刊行されているものに関しては、邦訳タイトルのみ記載する。
- (2) 特にドゥルーズは、フーコーの偉大さを「現にこうであること」とは異なるもの、新しいものに向かっていく方向性に認めている。*Qu'est-ce que le dispositif*, p. 323 (「装置とは何か」, 230-231 頁) 参照。
- (3) ドゥルーズはフーコーの主体化論を論じるなかで、メルロ＝ポンティとハイデggerの存在論と突き合わせて、それとは異なるフーコーの「存在論」を展開している。つまりここでの「存在論」とは、現象学の延長線上にあるそれとは別の「存在論」を含意している。*Foucault*, p. 115 (『フーコー』, 202 頁) 参照。
- (4) ドゥルーズにおけるベルクソンからフーコーへという論の道筋は、1985年に出版された『シネマ2』に現れている。『シネマ2』は、ベルクソン由来の概念を利用しながら「潜在性と現働性」の議論を引き継ぎ、『シネマ2』全体を通して、現働性優位ではない仕方で潜在的な力を発揮させることを問うている。そのなかで「視覚－聴覚の分離」という常に規定されない間隙を持つ映画について論じた、最後の第9章にてフーコーの名前を出す。そしてこの『シネマ2』第9章と同様の議論が、後年の『フーコー』においてもみられる。
- (5) *Qu'est-ce que le dispositif*, p. 322 (「装置とは何か」, 229 頁) 参照。

## 参考文献

- Deleuze, Gilles. 1986. *Foucault*. Paris: Minuit. (ドゥルーズ、ジル 2007 『フーコー』 宇野 邦一訳、河出文庫。)
- 。1989. *Qu'est-ce que le dispositif?* In *Deux régimes de fous : textes et entretiens, 1975-1995*. pp. 316-325. Paris : Éditions de Minuit. (— 2004 「装置とは何か」 財津 理 訳『狂人二つの体制 1983－1995』 pp. 219-234、河出書房新社。)